セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.29

編　集　1994．3．31
発　行　佐賀県立九州陶磁文化館
代表者　山　田　陸　三
〒844 佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100-1
電話 0955—43—3681
印刷所　山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5

象嵌燭台（ぞうがんしょくだい）　(2)　館蔵資料

肥後・八代焼
19世紀
口径9.1cm　高さ60.1cm　底径15.8cm

一対の燭台である。胴部にいくつかのくびれをもたせ、底部は裾広がりになる。ふくらみの部分に透しを入れ、くびれの部分には花文や雷文などの文様を白土で象嵌する。江戸後期にはやきものの食器が庶民の間まで普及するが、食器以外のやきものも数多く作られ、この燭台もそのような一例である。

特別企画展のお知らせ

平成６年度特別企画

「よみがえる江戸の華」展

――くらしの中のやきもの――

○主旨

中世では特殊なものであったやきものは、近世に入ると多くの陶磁器が焼かれるようになり、さらに江戸時代後半には、あらゆる階層の生活にまで浸透し、現代に至る陶磁文化の基礎を成しました。

日々のくらしの中での食器や酒器をはじめ、灯明皿や火鉢、また紅皿やうがい碗などの化粧道具、硯や水滴などの文房具など色々なやきものが焼かれました。しかし、生活様式の変化にともない、現代では使われなくなったやきものも少なくありません。

この展覧会では、このようなくらしの中のやきものをとらえ、豊かに育んできた人々の生活史の諸相を紹介するものです。

○主催

佐賀県立九州陶磁文化館

○会場

佐賀県立九州陶磁文化館　第１・第２・第３展示室

○会期

平成６年10月７日（金）～11月13日（日）

休館日　10月17日(月)、24日(月)、31日(月)、11月７日(月)

○観覧料

大　人　　600円(500円)＊(　)内は20名以上の団体

大学生　　300円(200円)

○図録

展示品の図録を刊行する。

○シンポジウム

種々の専門家をパネラーに招きシンポジウムを開催する。

○展示構成

１．日々のくらし

食の器（皿、鉢、碗、瓶、酒器、食膳など）

食の道具（鍋、すり鉢、ほうろく、土鍋など）

すまいの道具（灯下具、燭台、火鉢、手焙り、釘隠しなど）

貯蔵の道具（甕、壺、瓶など）

２．くらしの彩り

化粧の道具（紅皿、うがい碗、油壺、薬盒、お歯黒壺など）

よそおいの道具（緒締め、根付けなど）

３．くらしの楽しみ

娯楽の道具（将棋、人形、植木鉢、鳥籠、鳥餌入れなど）

喫茶の道具（茶碗、水指、香合、懐石膳など）

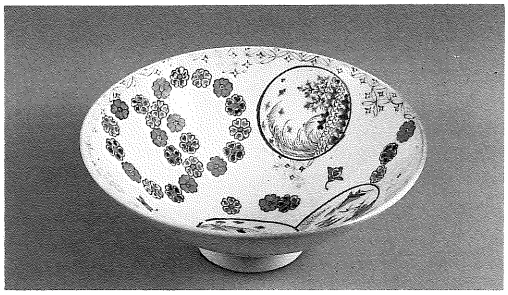
喫煙の道具（たばこ盆、煙管など）

文房具（硯、硯屏、水滴、筆架、筆など）

４．くらしといのり

ほとけの道具（仏飯器、香炉、蔵骨器、胞衣壺など）

神の道具（御神酒徳利など）



化粧道具の一つである色絵うがい碗

展覧会報告

Kaffee aus Porzellangeschirr und Aludosen

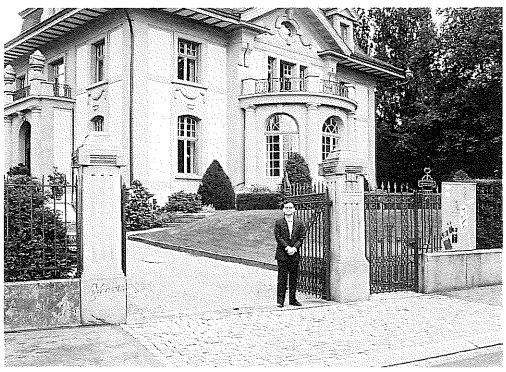
(有田焼と缶で味わうコーヒー展)

平成5年6月3日から8月15日まで、スイス・チューリッヒ市のヨハン・ヤコブス博物館で「有田焼と缶で味わうコーヒー展」と題された展覧会が開催されました。この展覧会はチューリッヒでの日本週間の一環として行われたもので、当館の所蔵品を中心に36件が出品、展示されました。

有田磁器は17世紀後半から18世紀にヨーロッパへ大量に輸出されたが、その中にはヨーロッパからの注文によりヨーロッパの生活に即した製品も数多くあった。当時、コーヒーや紅茶、ココアといった温かい飲み物が普及しつつあり、この高価な飲み物のために熱を伝導しない、優れた材料でできた器が必要となってきたのである。このような事情を反映して大量の有田磁器のコーヒーや紅茶のためのカップやポットがヨーロッパに輸出されたのである。

ヨハン・ヤコブス博物館はチューリッヒ湖畔に近い静閑な立地に建てられた財団立のミュージアムで、飲み物としてのコーヒーの歴史やその道具などを展示したコーヒー博物館として知られている。マイセンをはじめヨーロッパの陶磁器のコーヒーポットやカップ、ソーサーなどを多数収集しており、今回特にヨーロッパの磁器に大きな影響を与えた有田磁器に注目して、有田磁器のポットやカップなどを展示する「有田焼と缶で味わうコーヒー展」を開催することとなったのである。5月30日から6月3日まで作品開梱・展示指導および開会式出席のため当館の大橋康二学芸課長が、また8月15日から20日まで宇治章学芸員が作品点検・再梱包のためヨハン・ヤコブス博物館に出張した。会期中、多数の入館者があり、好評のうちに無事に展覧会が終了した。

チューリッヒ市での日本週間は、全市をあげて種々の催し物を開催しており、主な展覧会だけでもリートベルグ美術館の「ZEN-禅展」、「Nö-能展」、ベルリヴェ美術館の「MINGEI-民芸展」、市庁舎での「SHO-書展」をはじめ、日本の現代アーティストの作品展など、また演劇では伝統的な能（羽衣）や、蜷川幸雄演出の「王女メディア」など、さらにオーケストラやコーラスによるコンサート、小津安二郎監督作品の上映など幅広く日本を紹介している。また駅前の広場や建物の前に折り紙の鶴やくじゃくを模したオブジェが置かれ、市の中心の広場には日本のサーカス・テントが立てられている。市内を走る市電には寿司を食べさせる電車が連結されており、人々はビールを飲みながら寿司を食べ日本週間を楽しんでいました。



ヨハン・ヤコブス博物館の前に
立つ大橋学芸課長

展示資料の点検(左端がバール館長)

展示風景

行事・展覧会スナップ

第４回　九州近世陶磁研究会

平成６年２月５日～６日に、第４回九州近世陶磁研究会が開催されました。同研究会は、平成２年12月に発足し、九州の近世陶磁の情報交換および共同研究の場として、毎年研究会を開催してきました。毎回、九州の近世陶磁についてテーマを設け、生産地側の九州の研究者や文化財担当者、また消費地である東京や関西の研究者などによる研究発表ならびに討論を行ってきました。

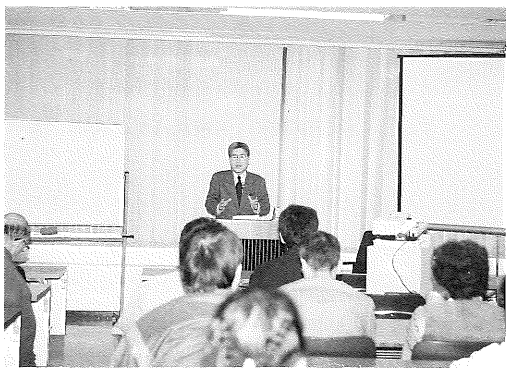
今回の第４回研究会は前回に引き続きテーマを「唐津焼」とし、消費地での唐津焼の出土状況について研究発表および事例報告が行われ、生産地側の研究者との相互認識をはかり、かつ両者を交えて検討することとしました。まず２月５日には記念講演として羅善華先生（韓国・梨花女子大学・博物館）により「朝鮮前期　白磁古窯跡考」と題して、16～17世紀を中心とした朝鮮半島での古窯跡の発掘調査の状況を発表していただきました。同じく記念講演として、韓国に何度も行かれ韓国の窯跡について研究をされている倉田芳郎先生（駒沢大学・教授）から「韓国の陶磁器」と題して話をしていただきました。さらに中尾浩先生（佐賀県窯業技術センター主任研究員）に「唐津焼の釉薬について」と題して記念講演をしていただきました。

２日目の６日には消費地での唐津焼の出土状況として、森毅氏（大阪市文化財協会）「大阪出土の唐津焼の変遷」、森村健一氏（堺市立埋蔵文化財センター）「堺環濠都市遺跡出土における出現期の唐津窯系陶磁器」、下村節子氏（枚方市文化財研究調査会）「枚方宿遺跡第３次調査第４面出土の唐津焼」、堀内明博氏（京都市埋蔵文化財研究所）「洛中出土の肥前陶器」、加藤有重氏（平戸市教育委員会）「平戸和蘭商館跡出土唐津系陶器について」等の事例報告、研究発表があり、最後に羅善華先生、倉田芳郎先生、中尾浩先生、発表者の森毅氏、森村健一氏、下村節子氏、堀内明博氏それに村上伸之氏（有田町教育委員会）、盛峰雄氏（伊万里市教育委員会）、司会に大橋康二（九州陶磁文化館）の出席者による討論会が行われ、唐津焼と韓国との関係を探る意味で、その窯構造や窯運具、窯積技術、製品などについて比較・検討がなされ、影響関係を認識するとともに、問題点を提起し今後の課題とし討論を終えました。また、各地の消費地遺跡や窯跡から出土した唐津焼の陶片資料を多数持参していただき、会員の参考に供され、なかでも最近、発掘調査された多久・唐人古場窯の出土陶片に関心が集まっていました。

最終日の討論会風景

陶芸文化講座

平成６年３月５日に、当館会議室において陶芸文化講座を開催いたしました。今回は大阪市立東洋陶磁美術館長・伊藤郁太郎氏に「最盛期の高麗青磁」と題して講演していただきました。伊藤先生は、中国陶磁をはじめ東洋陶磁の優品を多数所蔵する東洋陶磁美術館にあって、とくに高麗青磁にも深い造詣を持たれており、今回は高麗青磁について初期から末期に至る青磁の変遷を通覧するなかで、最盛期の技法や特質をスライドを交えて約２時間、話をされ、窯業関係者や一般の方々が熱心に聴講されました。



スライドを使って講演する伊藤先生

野趣の美

古唐津の流れ展

―桃山から江戸―

平成５年11月11日から12月５日まで、第１・第２・第３展示室において「古唐津展」が開催されました。

唐津焼は、肥前地域で焼かれた陶器の総称で、その古窯跡は唐津市や東松浦郡、西松浦郡、伊万里市、武雄市、塩田町、嬉野町、佐世保市などに百か所以上知られている。唐津焼がいつ頃から焼かれ始めたかは明確ではないが、およそ室町末期頃と推定されている。唐津焼が大きな進展をみせるのは、文禄、慶長の役の後、渡来した陶工達によって多くの窯が開かれたことによるもので、また桃山から江戸末期にかけての茶の湯の隆盛にともなって、国産陶に対する需要の高まりが、その生産に拍車をかけたものによると考えられている。「一楽二萩三唐津」は、そのような事情をよく表した語といえよう。本展は、今日まで茶人の間で大いに賞玩された「古唐津」の名品の数々を一堂に展示し、その特質を紹介するものです。

展示風景

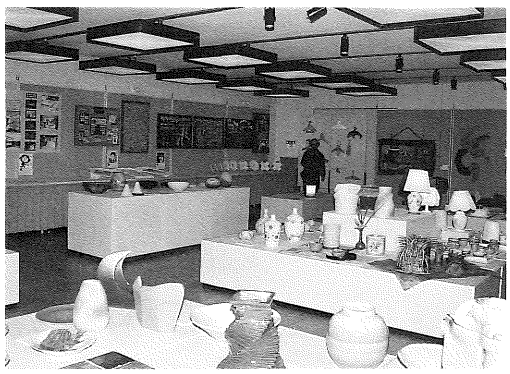
佐賀県陶芸協会展

平成５年12月14日から12月19日まで、第１展示室において、佐賀県陶芸協会展が開催されました。佐賀県陶芸協会展は毎年、佐賀市や東京、大阪で行われていますが、平成２年からは九州陶磁文化館でも開催されるようになり、今回で第３回展になります。会長の今泉今右衛門をはじめ、酒井田柿右衛門や青木龍山、中里太郎右衛門といった佐賀県を代表する陶芸家51名の最新作が一堂に展示され、熱心な陶芸ファンが数多く訪れていました。

展示風景

有田工業高校 卒業制作展

平成６年１月25日から１月30日まで、第１展示室、展示ホール、エントランス・ホールにおいて、有田工業高校卒業制作展が開催されました。デザイン科としては第24回、窯業科としては第５回の卒業制作展で、デザイン科生の作ったポスターなどのグラフィック作品、テーブルや照明器具などの立体作品、窯業科生の制作したコーヒーカップや花瓶、置物、タイルなどが展示されました。エントランス・ホールや展示ホールに木や布、糸、金属、陶磁器などを使用したオブジェが展示され、また茶室空間に屏風や掛幅に仕立てたグラフィック作品も展示され、その奇抜なアイディアに人々の大きな関心をかっていました。



展示風景

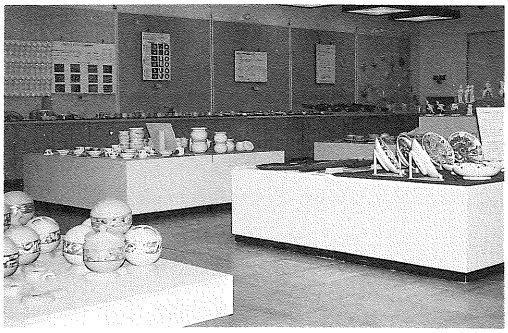
第５回九州陶磁器デザイナー協会展

平成６年２月22日から２月27日まで第１展示室において、第５回九州陶磁器デザイナー協会展が開催されました。今回のテーマは「注ぐ」で、会員がデザインしたポットや急須、醤油差しなどの注器が展示されました。おのおの斬新な形態や色彩、器種のバリエーションを考案するなど多様な造形を提案して、訪れた方もしきりに感心していました。

展示風景

第８回有田窯業大学校卒業制作展

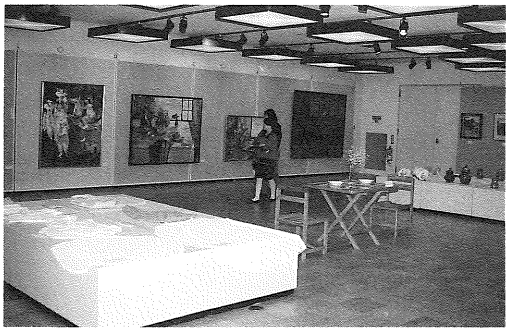
平成６年３月８日から３月31日まで、第１展示室、展示ホール、エントランス・ホールおよび屋外展示スペースにおいて、第８回佐賀県立有田窯業大学校卒業制作展が開催されました。本科生と研究科生の作った食器セットや調味料入れ、絵皿、花器、楽器、人形、照明器具やオブジェなど、また短期研修生のロクロや絵付けの作品などが展示されました。



展示風景

西松浦郡小中学校教職員美術展

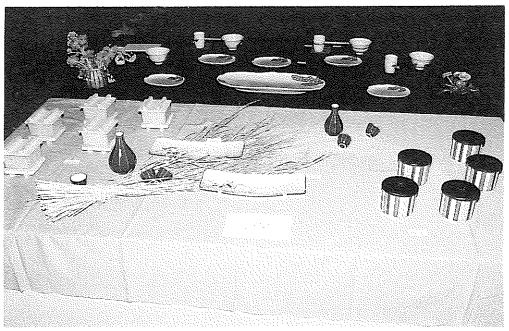
平成６年３月２日から３月６日まで、第１展示室において、西松浦郡小中学校教職員美術展が開催されました。西松浦郡内の小中学校の教職員が作った陶芸や油絵、水彩、写真、書、木工などの作品が展示されました。なかにはセーターや刺繍のテーブルクロスなどの生活に密着した作品も多く、見る人を楽しませてくれるものでした。



展示風景

第９回有田陶交会展

平成６年３月15日から４月21日まで第１展示室において、第９回有田陶交会展が開催されました。今年のテーマは「伝統有田―米との関わり」で、飯茶碗や丼などの食器や酒器などを中心として、22の窯元の作品が展示され、関心の高さも反映して熱心に見入っていました。また３月20・21日には協賛茶会も開催されました。



展示風景

シリーズ
やきものにみる文様 (26)
婦人図、婦人文様

婦人図は、染錦手のものに伝世品が多く知られ、伝世品の多くは海外へ輸出されていたものである。婦人図は、装束、風貌が異国情緒を満たすものであることから、海外輸出品として好まれた文様のひとつであったと想像される。幕末から明治にかけての輸出品に、武者絵など日本的な人物像が多くみられるのも同様の理由であろう。

描かれた婦人図はその当時の風俗を反映していると考えられるが、古伊万里の文様のほとんどが、現実世界を忠実に再現するものというより、むしろ巷に流布している流行の文様を採用し、組み合わせて多様な文様世界を創造していることに留意しなければならない。古伊万里の婦人図は初期浮世絵にみられる婦人図の描き方に共通項が多い。菱川師宣（？—1694）によって確立した初期浮世絵は、木版刷りの挿し絵や絵本を媒体として延宝、天和、貞享期に全国へ普及した。古伊万里の文様にみられる婦人図も、一般へ流布しはじめていた浮世絵が手本であったと考えられる。古伊万里にみられる婦人図と唐人図とでは同じ人物表現であってもかなり異なっている。これは、唐人像が輸入中国磁器を手本にし、中国磁器に描かれることのない日本人像の手本は浮世絵にあるからである。

挿図の婦人図は〈傘持ち美人〉という呼称でよばれる図様である。同種の図様ではコルネリス・プロンク（1691—1759）の1734年のデザインによる注文制作品が有名である。挿図と同じ図柄の伝世品は、ドイツのヴァイセンシュタイン城の沈香壺と筒形瓶のセットが知られる。　（永渕友子）

染錦近江八景風俗絵図大皿
有田　18世紀初頭(蒲原コレクション)

シリーズ
やきものの技法 (26)
銅緑釉

透明釉に酸化銅を３％から５％加えて酸化焼成をすると緑色の釉薬となる。これを銅緑釉、あるいは単に緑釉とよぶ。織部焼の代表的な釉薬であるため、織部釉とよぶこともある。

釉薬の呈色材としての銅分は、釉薬に様々な色をもたらす。酸化で緑色となる銅緑釉は、還元されると鮮紅色となる。還元によって鮮紅色となる釉は銅赤釉であり、一般に辰砂釉とよぶ。酸化と還元によって銅は緑と赤に発色するのである。

銅釉の基礎である透明釉の性質を変えると、発色が異なってくる。透明釉の中にソーダなどのアルカリがはいれば銅は青くなる。低火度釉の場合は、イスラム陶器に見られるようなスカイブルーの美しい色調が得られる。同じ低火度釉の場合でも、鉛釉が基礎材であれば、緑色の釉薬となる。漢の緑釉や唐代の三彩にみられる緑釉である。

銅緑釉湯庫
壺屋　18世紀後半
館蔵

日本でも奈良時代に唐三彩にならった三彩が作られている。しかしその後はなくなり、16世紀にはいって今度は高火度の銅緑釉が美濃に現われる。唐津においても17世紀初頭に銅緑釉が白化粧とともに登場する。このルーツは朝鮮の陶技と考えられるが、今のところ朝鮮半島での窯出土の陶片が確認されていない。また織部の銅緑釉がどこから来たかであるが、化粧土をともなう点から唐津の影響とも考えられる。いずれにしても銅緑釉は陶器の装飾技法として唐津と織部において多様に展開し、その後日本各地の陶器窯で流行した。九州では沖縄県の壺屋焼、福岡県の上野焼、小石原焼などによく見られる。　（鈴田由紀夫）

陶磁資料寄贈者芳名(敬称略)

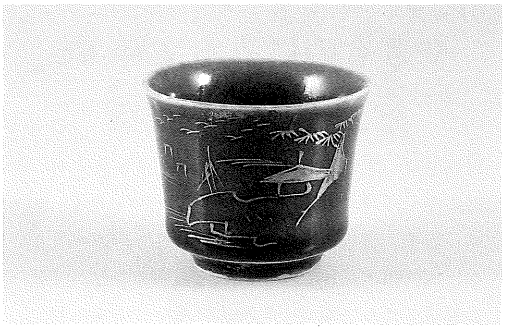
〔平成５年４月１日～６年３月31日〕

九州陶磁文化館に資料をご寄贈いただきましてありがとうございました。ご寄贈いただきました資料は、永く保存すると共に、研究・展示等に供したいと存じます。今後とも、ご協力をお願い申し上げます。

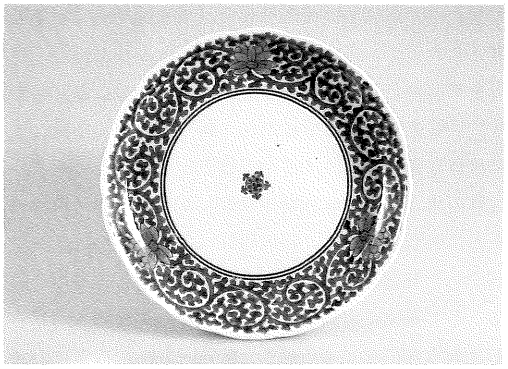
ご寄贈いただきました資料は、新収蔵品展（平成６年５月24日～６月５日）に展示し、広く県民の皆様にご高覧いただく予定です。

水戸レン	東京都	染付印判手菊文小皿
岡田　弘	熊本県	染付山水文大皿、染付団鶴文碗、染付唐草遊戯文小皿、白磁小杯
島田礼子	岡山県	瑠璃釉金彩山水文猪口、染付草花文猪口
浦川清平	佐賀県	色絵雲文球形置物
寺川泰郎	大分県	緑釉流大甕、掛分釉瓶
関　和男	大阪府	青磁陽刻七宝繋文皿
星川孝蔵	東京都	染付唐花唐草文鉢、染付花唐草文鉢、染付唐草文壺、染付唐草文蓋付壺、染付松竹梅唐草文大皿、染付唐草文猪口、染付松竹梅唐草文猪口、染付四弁花花唐草文小皿、染付五弁花花唐草文輪花皿、染付牡丹唐草文深皿、染付松竹梅唐草文長皿、染付花唐草文火入、染付菱菊文碗、染付亀甲文蓋付碗
山崎隆生	福岡県	染付オランダ風景文波縁皿、染付芙蓉手輪花皿

染付山水文大皿　網田焼　19世紀　岡田氏贈



瑠璃釉金彩山水文猪口
肥前・有田皿山　18世紀後半～19世紀　島田氏贈



染付五弁花花唐草文輪花皿
肥前・有田皿山　17世紀末～18世紀前半　星川氏贈

染付芙蓉手輪花皿(5)
中国・明末　17世紀前半　山崎氏贈

利　用　案　内

開　館　午前９時～午後４時30分　月曜休館
年末年始(12月28日～１月４日)休館

観覧料　一般200円(150円)／大学生150円(100円)
小・中・高校生は無料。
( )内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度に定めます。

交　通　佐世保線有田駅下車徒歩10分